

## A Translation of Poems Excluded from The Temple by George Herbert

鬼塚，敬一  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5415>

---

出版情報：言語文化論究. 7, pp.153-164, 1996-03-01. Institute of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



『聖堂』には見られず、  
〈ウイリアムズ詩稿〉に収録の六つの詩篇及びその他

ジョージ・ハーバート (1593-1633) 鬼塚敬一 (訳)

I. 聖餐

おお、慈悲深き主よ、どうして 私に判りましょう？  
この<sup>1</sup>賜物にあっても、御身が 到るところに遍在なされると  
同じ様態で 在らせ給うのか、それとも、  
御身<sup>2</sup>のみが その宿を独り占め給い  
御身の哀れな麵包と葡萄酒には  
まったく居場所をお残しではないのか、など。

まず信じて居ります、麵包がそこに<sup>とどま</sup>留っているのか  
とび去っているのか、それは麵包に関わること  
私には関わりのないことを。  
御身とそのお供がみな、御身の<sup>まこと</sup>真理と私の為に  
そこに在り給うということこそが  
御身と私の関心事なのです。

また、御身<sup>あだ</sup>の仇敵のもとに向かわれるとき  
まっさきに かれらのもとに進まれるとすれば、  
それは、御身の善意の緊要性の証しです。  
あるいはもし、麵包と私の二ヶ所に 留まられるのなら  
御身の<sup>のり</sup>道程は長くなりましょうとも  
やはり、それは私のためです。

それから、このことをも、信じて居ります。  
表ではなく、罪をこそ 廃絶せんがため  
御身は苦しみを耐え忍ばれたということ。  
被造物は善にして、己れのあるべき居場所を<sup>わきま</sup>弁えています。  
ただ罪のみが、あらゆるものを汚すため、御身は  
罪をその居場所より放逐され給う。

御身の肉が麵包の中に宿られるという説<sup>4</sup>をも 私は信じましょう

受肉を信じますと同じ程に、

もしも御身が麵麩<sup>パン</sup>の為に 死に給うたというのであれば。  
 だが、私の魂を死に到らしめたもの、わが肉体<sup>にく</sup>  
 その極悪非道ぶり、これこそがまた  
 御身の死をも招いたものなのです。

御身の肉<sup>にく</sup>がそこに在ることを 私の眼は否定します。

五感のうちでも最高位の視覚が見つけれずして、

何が 肉を見つけれましょう？

燦然たる聖体が眼に見えなくとも

聖体は 糧とも力とも強さとも なれるでありましょうか？

さようなものに騙され易い人間においてすら？

この聖体が私の魂に入り込むことはありません。

肉は（高められようとも）物的本性を依然引きずり

魂に 変ずるなど かなわぬことです。

肉体と精神とはまったくの別もの

両者はその領域と境界を変えることは 能わず、

不変の極を堅持します。

この賜物はあらゆる贈物のうちでも最上のもの、

御身の肉は 私が請い求めることの最も少ないものです。

主は私よりあの誓約<sup>ちやく</sup>をおとりになられた。

私が以前もっていたものは お与え下さいますな。

それとも お与え下さい、さらに多くもてますように、私の神よ、

御身のすべてをこそ、私にお恵み下さい。

The H. Communion

## II. 愛

御身は、愛にかけては、私にとって余りに手ごわい相手です。

愛の技では、御身に太刀<sup>たち</sup>うちなど、到底叶いません。

それぞ、私が目にする御身の偉業です。

私の方の勝利となるような 何か立派なことを成さんものと

私が囹りめぐらすときも、おお主よ、御身はつねに

出し抜かれてしまわれます。

しばしば 己れの体を洗う時など こう呟くのです

痛烈だと我ながら思うのですが、〈主よ、この魂をこそお洗いきださい、

その有様は この肉体の汚れの段ではございませぬ。〉

だがその時、御身のいにしへの洗礼が 行く手に  
姿を見せます。それは、私が汚れていてそれと気付かぬ間にも、  
私の汚れを洗い清めてくれました。

御身が眠り込まれたため、苦悩の大うねりが  
私の心に格闘を挑むということもありました。  
私は思いました、今こそ御身を誉め讃えるのは素晴らしいことだと。  
でもその時、気付いたのです、御身は喜々として この心の内に  
忍び込まれ、肉が御身に差し延べたより もっと深い安らぎを  
もう一度恵み返してくださるものだと。

愛の件では、一度だけでも私に勝利をお譲りください  
それも、つまりは、御身の勝ちとはなるのですから。  
御身が 哀れな人間を打ち負かされても  
それは 墓穴がなす程の手柄でしかありません。  
ところが、もし私が御身と御身の愛とを征服できれば  
地獄、死、悪魔とて 私に 手が届かなくなるのです。

Love

### III. 三位一体の祝日<sup>1</sup>

自然一つでは  
人間は無。  
恩寵を得て 二つに成れば  
かなりは 御身に近づく。  
自然と恩寵とが、  
栄光をかちえて、御身の聖顔に達する。  
鋼と火打石とで 火は発す。  
知と意では  
御身のもとまで 昇るは能わず、  
魂が この両者をしっかりと把えていなければ。  
三位一体の神を信じぬ  
サタンの慢心<sup>2</sup>は  
彼を突き落としかねぬ  
天上から 地を経て 地獄の淵までも。  
地と地獄の二者のみを  
墮ちる者たちは 与えたまえ。  
されば彼らは 逐には神も天使も聖者をも喪う。  
一なる神をもつ者は  
すべてをもつのだ。

IV. 晩 禱<sup>1</sup>

太陽<sup>ひ</sup>は没して、私に対して望みを遂げた。

太陽と私とは競い合って走ったのだ。

私の方が遅かった、でも私の歩調はもっと慌しかった。

なにせ 萎えているのは私で、太陽ではないのだから。

主よ 私の損耗をとり戻し、この身を闇より解き放ちください。

今は、昼間 太陽の大胆な輝きを

眺めることも叶いませんが、この私が 明日には

太陽より もっと輝くことが出来ますよう。

もしも御身が、この光を先延しになさるのなら、そのときは

この身をまるごとお譲りください。夜一大地の暗鬱な陰一が

この寝ぐらを汚し、私の世界に攻め込んだり致しませぬよう

まるで陰が 御身など識らぬかのごとく。

だが、御身は 光にして また 闇。

もしもその闇が暗ければ、私たちには何も見えない

太陽は 樹木より見えにくく

御身は そのいづれより さらに見えにくい。

ところが、御身はそれほど見えにくくはないのです。なぜなら私は知っています、

御身が見えないということ、私の闇が御身のそれに

触れることが能わぬ限りは。そこで 御身の闇が 私の闇に

光り輝く術を教えてください 望みます。御身の闇は光であるゆえに。

おお、わが魂が一その鍵を、御身を識らぬ

愚かな夢の手中に託さねばなりませんが一御身の光輝を

吸い込み、御身と共に

永遠<sup>とわ</sup>に目覚めているよう、御はからい給え。

Euen-Song

## V. 鐘 音

弔鐘がなっている。

主よ、御身の僕<sup>しもべ</sup>をお助けください。

困惑したこの魂は、憂いに沈み

見つめて居ります 右を、左を。  
ある時は話し合いを申し出、またある時は抵抗<sup>あらがい</sup>をあらわにします。  
いづれとも決めかね、あえぎつつ。

今ぞ、たけなわ  
今こそ、我らの肉と理性との大格闘の時。  
おお、救いを、私の神よ！  
御照覧あれ あの者どもが闖<sup>ちんにゆう</sup>入いたします  
解き放たれたむら気 悲嘆、群れなす罪々  
各々が 鞭をかまえつつ。

主よ、御身の血潮で  
悲しみのあの海原と 流れとを  
すっかり変えて、朱に染めあげ給え。  
私共が御身に救いを叫ぶ時  
それらがコーディアルとも  
強壯液ともなりますように。

The Knell

## VI. 究極救済<sup>1</sup>

神よ、私の愛のこの雅拙な表現は この詩歌に  
温<sup>ぬく</sup>もりを添え それをみもとへと 捧げます、  
今のところは、それは、わが心が語らんとするまま  
いやむしろ 御身が この心を動かされるがままにです。

でも、そこからどんな結果が生じるのかは、御身とともに封印さたまま、  
これらの私の言葉が 他人を救うことはあっても  
この身に対する断罪にはならぬものかなど、  
ちょうど 猟銃が暴発し、そのため鳥は助かっても猟師は死ぬのと同じ具合に。

と申し上げますのも、一体誰に判り得ましょう？ よしんば御身が、わが魂を  
かち得て 輝かしい樂園でその魂と結ばれん為にお亡くなりになったのだとしても、  
わが罪の数々と科<sup>とが</sup>の慣習<sup>ならい</sup>が、その婚姻の予告と喜びに  
異議申し立てをせぬものか否かなどは。

ただこの魂は、約束<sup>よ</sup>の御言葉に ひたすら 縋りつくばかりです、  
この顔も両手も 御身の御胸にからませながら  
しがみつき、泣きわめき、止めどなく 叫びます  
(御身は 私の岩、私の安らぎなのです)。

アイザック・ウォルトンの『ハーバート伝』に収録された二篇のソネット<sup>1</sup>と銘文一つ  
〔ソネット (I)〕

私の神よ、御身をめざした往時のあの熱気は いまは何処にあるのでしょうか？  
 かの熱気を胸に 殉教者の群がこぞって かつては燃えたちました。  
 彼らの肉を焦がした焚刑の火焰に加えて。詩歌は ヴィーナスの  
 お仕着せをつけ、ただ 彼女に仕えるのみでしょうか？  
 何ゆえに 御身を讃える詩歌は詠まれない？ また詩歌は 御身の祭壇に  
 生けにえとして燻れないのか？ 御身の愛は、どんな美女にも負けずに  
 ひとの心を高めて、御身の讚美をうたわせられないのか？  
 御身の鳩<sup>3</sup>は 空高く かのキューピッドの翼を  
 易々として追い越せないのか？  
 それとも、御身の道は深く、つねに変わらず同じであるため  
 御名をとどめる詩は 滑らかに流れゆかぬというのか！  
 御身の強き御力に依り 各々の胸が覚えるかの炎は、何故に  
 いつの日か地の蛆すらさだめし顔をそむけるものにも等しい  
 美女をば選びとるのでしょう？

Sonnet (I)

〔ソネット (II)〕

まことに主よ、御身には墨汁の大海原を尽くしても、なお  
 表現し切れぬものがございます、かつてノアの洪水が地の表を  
 覆ったように、今や主の大御稜<sup>4</sup>が この地に漲っていますゆえに。  
 雲はいづれも 御身への讚美を降らせ  
 詩人たちにも 他へのその転用を禁じております。  
 薔薇も百合も御身を語っています。この両者の紅・白をもって  
 美女を崇めまつるは 御身を侮辱するにも同じ。  
 なぜ 私が女性の眼を水晶の明眸と仰がねばならぬのでしょうか？  
 さような見下げ果てた作意は 詩詠みたちの低き心の内で燃え上るもの。  
 彼らの火は放埒至極、天に昇って御身を讃え  
 主よ御ために 幾ばくの墨汁をすら費すこともない。  
 人格の骨格を開けて見よ、何ものも見出せぬ  
 最高の美貌の下にも あるのは唯 肉の汚れのみ。主よ  
 御身のうちにこそ 美は われらの発見を待ちわびているのです。

Sonnet (II)

わが後任者へ<sup>4</sup>

あなたの心に適う  
 己の費用をかけずに建った  
 新しい家を はからずも入手できれば、  
 貧しき人びとに親切を尽くすべし、  
 神があなたに たっぷりと恵み給うごとく。  
 されば、わが労苦も徒<sup>あだ</sup>とはならぬ。

To My Successor

ダン博士へ、錨に十字架のキリストを象った  
 印章を贈られて<sup>1</sup>。

十字架もキリストをこの地上に引き留めることは出来ませんでした。  
 たとえ、十字架に釘付けされていても、主は再び昇天なされました。  
 あなたの雄弁もまた、主を常時ここに留めおくことは能<sup>かな</sup>いません、  
 ただ、あなたの説教が鳴り渡る間だけは別にして。  
 だが、この錨はそれをば果たすであります。  
 ただあなたは御満足出来ない、  
 この確固たる錨にひとつの印<sup>しるし</sup>が<sup>2</sup>加えられねば。  
 こうして 海も大地も共に あなたの御陰で己の確実さの象徴を手にした次第です、  
 この世はよろめくもよし。私たちとわれらの信仰は  
 確固にして揺るぎなく、この聖なる錨索はどんな嵐にも絶対に安全です。

友誼<sup>3</sup>厚き博士も、書き疲れ、友への親しき文を  
 書き終えられたときには、署名をなされた。  
 だが、最早その手がペンを執ることもありえねば  
 博士はこの印章を贈られて、静かに身罷られた。

何と心優しい友であったろう、博士は。御自分の文が  
 乱暴に開封されるのに心痛められつつも、  
 印章を付け加えることは（何ものも破られるべきでない）  
 大いなる愛の共同体では一層安全なことである、と信じなされた<sup>4</sup>。

To Doctor Donne upon One of His Seals:  
 The Anchor, and Christ

## 訳 注

注のなかに用いた人名・詩稿の略記は次のごとくである。



H=Hutchinson, F. H.      P=Palmer, G. H.      S=Summers, J. H.  
SH=Shawcross, John T.      T=Tobin, John

※ 当訳はすべてF・H・ハッチンスン版（オックスフォード）に拠る。この版は一六三三年版とB詩稿の両者の長所を採った折衷版で、主に用語面ではB詩稿に、その他の点では三三年版に依拠。

詩集『聖堂』（1633年）の中には収録されず、〈ウイリアムズ詩稿〉のなかに見られる六篇の詩。

### I. 聖餐

- (1) 聖餐式でのパンとぶどう酒の意
- (2) この三行はカトリック教会の説く化体説を下敷きにウイットをきかせ多少揶揄まじりに描いたもの。つまりカトリックでは聖餐式で聖別されたパンとぶどう酒はすべて外見はそのままながらもその本質はキリストの肉と血に変化すると信じられている。これに対してカルビン派などは聖体中のキリストの存在はひとえに聖体拝領者の信仰に拠るものであるとする。この両極端の中間にアングリカンの教義はあり、聖別されたパンとぶどう酒のなかにキリストの肉と血は本質的に真実に存在するがその存在のありようは人間精神が理解し表現出来る域を越えていると考える。ここから、アングリカンの聖職者の聖餐論にみられる神の存在の様態に対する曖昧、無関心なども派生して来ると考えられる。ダンやアンドリュースの説教をその好例としてグリアースンも挙げている（H）。
- (3) この地上の人間の意。罪深い存在ゆえに主キリストの仇敵とここでは考えられている。
- (4) キリストの受肉（Incarnation）とのアナロジーに元来由来する教義で、キリストの肉体と血とが聖餐のパンとぶどう酒の中に宿っていると見る見解。
- (5) この連の真意がいまひとつ訳者には明らかでない。ただ、詩人がここで言わんとする要諦は、この地上では人間の眼で神を見ることは不可能であり、さらに聖餐式での奇跡においてすらこれは無理であるという意。
- (6) 恐らくこれは、聖餐式で拝領者たちが唱える次の一節を念頭に浮かべてのものであろう（S）。「おお主よ、ここでわれらは、私たち自からを、この身と魂とを、主への妥当な、聖なる、生ける犠牲として捧げまつります……」

### III. 三位一体の祝日

- (1) 聖霊降臨祭ペンテコステの次の日曜日で、復活祭後第八の日曜日にあたる。父と子と聖霊の三位一体を祝う主日。
- (2) サタンは彼なりに神を信じていたが、神、天使、聖人の、この三つよりなる謂わば三位一体を認めることはなかったし、また天、地、地獄の三つの存在をも否定した（P）。そのため天上の神のもとを追われ、地と地獄に幽閉の身となったと言われる。だが、このサタンとちがいが、正しく三位一体の神への信仰を告白するものは全てを得ることになる（最終行参照）。

### IV. 晩禱

- (1) この作品が『聖堂』に収録されなかった最大の理由としてJ.ラル（Lull）という学者は“The

Poem in Time”のなかで、ここにみられるように神の力の及ばない存在やモノ、たとえば悪や闇（夢）などを余りに大きく前面に押し出しすぎたくないという秘かな詩人の願望があったからであろうと指摘する。その証拠に『聖堂』に収めてある同題名の作品では闇、悪などは背景の奥に小さく押し込められ、悪や罪は単に神の不在にすぎないことが暗示されている。実に〈夜一大地の暗鬱な陰〉がそこでは〈御身の漆黒の箱〉に変身しているのを見る。

#### IV. 究極救済

- (1) 原語は Perseverance, 堅忍恩恵とも和訳される。「ウエストミンスター信仰告白(1647年)」にはこれについて大意次のように叙述されている。つまり、神により選ばれ受け容れられた者は神の恵みから脱落することなく、遂に最後には究極の救済に到ることが出来ると。しかしこの作品は〈究極救済〉にたいする絶対的な無条件の讃美などではなく、詩人の己れ自身の究極救済についてのかかなりの懐疑と危惧を吐露したもので(特に第二一三連)、ハーバートには珍しくプライベートなトーンを滲ませた作品と言える。このことが引いては『聖堂』に収録されなかった一因かとも思われる。

#### アイザック・ウォルトンの『ハーバート伝』に収録された二篇のソネットと銘文一つ。

- (1) ウォルトンの伝記(一六七〇年)によればこれら二篇は詩人がケンブリッジ大に入学した最初の年(一六〇九年, 十二月), 新年の贈物として母親宛に次のような手紙と共に書き送られたソネットである。よって詩人が十七才になる直前の作と言える(H)。  
 〈ただ近頃煩った私のおこりの高熱のため、詩の女神たちが住みついている(と学者共が言う)かのへリコン山の聖皇の水も枯れ上ったのではないかと恐れています。  
 でも、ミューズの援けなど私には無用です、日々ヴィーナスの女神の為に詠み捧げられるあの数多の恋歌の虚飾・虚栄を叱責しますためには。また天上の神を目指す詩歌の数の乏しきを嘆きますためにも、無用です。私自身としましては真意は(御母上様)この二篇のソネットで、貧しくともわが詩才の、すべてをば絶えず、神の栄光のために聖別いたしますという決意を表明することにこそあるのです〉。
- (2) 「わが後任者へ」と題する六行句を指す。注(4)を参照。
- (3) 聖霊の意。ただ鳩は伝統的にヴィーナスの女神に仕える鳥でもあるので、多少のアイローが生まれる余地もある(T)。
- (4) ウォルトンの『ハーバート伝』(一六七〇年)によれば、ハーバートはこのベマトンの司祭館の修復を立派におえるや、そのマントル・ピースにこの六行句を彫りつけたと伝えられる。なおこの詩にはトマス・フラーの『聖なる国家』(一六四二年)に載っている別版があるが、それは作者名を付けずに次のような四行句になっている。

もしも心に適う家が己の費用もかけずに  
 できたのを見れば、あなたは  
 そのぶん一層、神と貧しき人びとに奉仕したまえ。  
 されば、わが労苦も徒とはならぬ。

ハーバートのラテン語作品に添えられた英訳詩  
—ダン博士へ、錨に十字架のキリストを象った印章を送られて—

- (1) ウォルトンは『ジョン・ダン博士伝』のなかで、ダンとハーバートの友情に触れながら次のように記している。「ダン博士は死の少し前に数多くの印章を作らせ、それらに、錨に十字架のキリスト像を彫らせ給うた」。そしてこれらの印章を友人達に形見として贈った次第だが、その中にハーバートも、ウォルトンも含まれていた。そしてハーバートの死後、このダンから贈られた印章と共に包まれたこの詩句が発見されたと伝えられる。元来、この作品はダンの「ジョージ・ハーバート氏へ、錨とキリストからなる私の一本の印章に添えて (To Mr. George Herbert, with one of my Seales, of the Anchor and Christ)」というラテン語詩に対する応答詩として詠まれたものであり、本来ラテン語で書かれ、それにこの英語版が付け添えられているという事情がある。こうして、この作品の初出は一六五〇年の『ジョン・ダン詩集』である。もっとも、ダンはこのシールを非公式には手紙に、1615年以前に使用したこともある (SH)。
- (2) 十字架のキリスト像の意。この場合、錨が十字架の形をしているものと思われ、それにキリストが身体を縛りつけられている図が想像できる。
- (3) 最初の十行の詩句は生前のダン宛に詠まれたものであるが、後続の二つの四行句は、一六三一年三月のダンの死後に書かれたものであることが、その内容からも判る。ウォルトンの『ダン伝』のなかには最初の十行の詩句のみが収録されている。恐らく後続の二篇については、それらがハーバートの真作であるか否かに<sup>シール</sup>彼は多少の疑念を抱いていたのであろう。
- (4) 手紙の封をした封蠟に刻まれた自らの印章が乱暴に開かれることにダンは心痛めつつも、封蠟に己れの印章を押すことは友情の書簡の安全性を確実にするものであると信じてやまなかったという含意。と同時に、自らの印章を、それも極めて象徴的な図柄のそれを、形見に親しい友に贈るという行為は、友情という封蠟に自らの印章を刻みそれによって、一層交友のもたらす共通の親愛を確かなものにするということでもある、という地口でもあろう。

## 後 記

今回の試訳をもって、ハーバート (George Herbert) の英語によって詠まれた総ての詩作品を翻訳し了えたことになる。

ところで最初にあげた六篇の作品は、Williams 詩稿 (以下Wと略記) には収録されているが、もう一つの Bodlein 詩稿 (Bと略記) と、さらにこれを基に1633年ケンブリッジで印刷された *The Temple* (『聖堂』) からは削除され、姿を見せない作品群なのである。因に、A. B. Grosart はこの六篇に1874年に“Lilies of the Temple”というタイトルを付して、ハーバートの全集版に収めている。

では、この六篇が顔を見せるWについて少し説明を加えておく。*The Temple* には詩人自身の手になる最終稿は現存せず、唯二つの詩稿、先述のWとBとが存在するのみである。Bは今日オックスフォードの Bodlein Library に在り、それにはこの詩稿の出版を許可するとの5名の検閲官の署名も見られる。

Wの方は収録作品数も78篇で164篇を数えるBの半数にも足りず、詩人の初期の作品群を編んだ、小型の牛皮装丁の詩稿で、今日ロンドンの Dr. Williams's Library に収められている。Wも

B同様に、詩人自身の自筆ではなく、筆写生の手になるものだが、そこに書き加えられた訂正などは、詩人自身のものだとされている。作品数がBの半数にも足らず、初期の作品を編んだものであるとは言いながらもWは、Bさらに1633年版の基本的骨格の殆どをすべてを備えた詩稿なのである。つまり、そこに見られる“The Churchporch”, “The Church”, “The Church Militant”より成る三部構成などの基本的方針は大略そのままにB、及び1633年版においても堅持されていくのである。三部のなかで主体をなす“The Church”（約160余篇）の構成、作品配列などの基本的コンセプトも既にWの段階でほぼ出来上がっており、‘The Altar’に始まる10余篇の詩群が冒頭に来ることも‘Love (III)’へと昇りゆくフィナーレの詩群が結びの位置にすわることも決まっていたのである。従ってBはWの基礎の上に増補、修正、加筆（またときには、この六篇にみるように）削除などを加えたものであるとすることが出来えよう。

ただ最大の相違点は“The Church”の中で‘Obedience’と‘The Elixer’の間に76篇の新しい作品が挿入配列されることになったことである。かようなため、Wがいかに変更、修正、改定されたかを丹念に調べることにより、更に、新たに増補された（後期の作と思われる）多数の作品とW本来のそれとを精緻に比較検証することにより、ハーバートの詩人としての展開をかなりの確に把握することが出来るのである。

Amy Charles という学者が行った、Wについての精緻な検証に拠れば、ハーバートはすでにWにおいて、技巧の点ではB編纂の時点に些かも劣らぬ完成された詩人の域に到達していたことが証明されている。特に、これら六篇の詩がもつ重要性についてだが、先述のように何故に *The Temple* の最終稿から詩人がこれらを削除せざるを得なかったかを探ることにより、さまざまなことが明らかになると思われる。これら六篇の内四篇が同一のタイトルでBと1633年版に顔を出すし、他の二篇もそれらと同一のテーマが、題名こそ異なれ詠まれていることなどを考慮すれば、ハーバートの詩人としての展開を調べる上からも、また神学的、精神的な詩人の魂の変遷をたどる上でも極めて重要性の高い原資料となり得よう。

次に試訳した二篇のソネットは、注にも記した通り、ウォルトン (Isaak Walton) の『ハーバート伝』(1670年)に収められている作で、彼によれば詩人がケンブリッジ大学に入学して迎えた最初の新年(1610年)の日の贈り物として母親に手紙と共に書き送ったものである。詩人の生誕が1593年4月であることを考えれば17歳になるや成らずの頃の習作だと言えよう。ただ忘れてならぬことはこの歳にして既に、当世の軽薄な恋愛詩の風靡を慨嘆し、我こそは今より己の全詩才を神の賛美のために捧げるのだと、その信念を高らかに謳い上げていることである。そして生涯絶えず彼がこの信念を貫き通したことは彼の全作品が実証するところである。この事はまた、Wが今まで想定されていたよりかなり若い頃の作品を編んだものだということの一つの傍証ともなりえよう。

次にあげる短い「わが後任者へ」もウォルトンの伝記の中に見られるが、彼が記すようにこの詩句が、牧師館の暖炉の前飾りに彫り刻まれていたかどうかは今日では疑問視されている。

最後にあげた「ダン博士へ……」は1650年の『ダン詩集』の中に初出の、ハーバートのラテン語詩に添えられた英語詩であるので削除すべきであったかも知れない。だが底本の Hutchinson 版は無論のこと、今回の試訳で大きく依拠した J. H. Summers の *The Selected Poetry of George Herbert* にもハーバートの正典として収録されていること、またかのウォルトンのダン伝記 (*Life of Donne*) にも (各版により異同はあるものの) 同様に入っていること、その上ダンとハーバートの交友関係を探る上からも、なかなか捨て難いと思われてならなかったので、敢えて採り上

げることにした。だがこの、10行詩と二篇の四行連句から成る作品は、最近の研究（H. Gardner や D. Novarr）によれば、ウォルトンが伝えるところとは異なり、10行詩は実は8行詩と二行連句が偶々癒着したものであり、最初の8行の部分だけは形見にダンより贈られた印章に対する謝礼の詩ではなく、1615年にダンが聖職入に際して創った同じ図案の（錨に礫りつけられたキリスト像）の印章を印したダンの書簡に対する返礼の詩であることが判っている。そして結末の二行連句と二篇の四行連句こそがウォルトンの伝えるところの形見の印章に対するハーバートの謝礼の詩であり、ダンがこの世を去った後に詠まれたものであることはその内容からも明らかである。